

「十二人の派遣」

ルカの福音書 9:1~6

1. 力と権威

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:1 イエスは十二人を呼び集めて、すべての悪霊を制して病気を癒やす力と権威を、彼らにお授けになった。

9:2 そして、神の国を宣べ伝え、病人を治すために、こう言って彼らを遣わされた。

イエシュアに呼び集められた十二人の弟子たち、彼らに「悪霊を制して病気を癒やす力と権威」が与えられました。当然のことながら、これらの力と権威は、神の御子メシア、主イエシュアの、その御名の力と権威ですから、旧約聖書の時代にこれらの力と権威を受け、行使した者は誰もいません。もちろんモーセやエリヤのような奇蹟や癒やしを行ったイスラエルの預言者たちは少なからずいますが、それらはイエシュアが「お授けになった」というものではありません。そして後々にこのイエシュアの「力と権威」は教会に、私たち異邦人の教会へと受け継がれていきます。以下は多くの異邦人教会を建て上げたパウロの記述です。

使徒の働き【新改訳 2017】

19:5 これを聞いた彼らは、主イエスの名によってバプテスマを受けた。

19:6 パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らは異言を語ったり、預言したりした。

19:7 その人たちは、全員で十二人ほどであった。

19:8 パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、人々を説得しようと努めた。

19:9 しかし、ある者たちが心を頑なにしてお聞き入れず、会衆の前でこの道のことを悪く言ったので、パウロは彼らから離れ、弟子たちも退かせて、毎日ティラノの講堂で論じた。

19:10 これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた。

19:11 神はパウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われた。

19:12 彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを、持って行って病人たちに当てると、病気が去り、悪霊も出て行くほどであった。

このように、パウロは初めはユダヤ人たちの「会堂」で「神の国について」語りましたが、ユダヤ人たちの「ある者たちが心を頑なにしてお聞き入れず」とあり、そのため彼らから離れ、異邦人たちの方へと向かいます。そこでパウロは「主イエスの名」主イエシュアの御名による「悪霊を制して病気を癒やす力と権威」を行使しています。このように、イエシュアによるこの力と権威は、私たち教会に与えられているものです。

しかしここで注意しなければならないことがあります。この主イエシュアの御名による力と権威は、私たちの今日の生活を快適に、幸福にするためのものではありません。また見る者聞く者をただ驚かせるだけのパフォーマンスでもありません。それはこの「十二人」が、そして誰よりイエシュアご自身がそうであられたように、すべて「**神の国を宣べ伝え**」るためのものであり、神の国とは…神の国が来るなら…そこに入るなら…誰でもみなこのようになる、主はこのようなことを成される、ということを示すためのものであり、人々に「**神の国**」の到来を告げ知らせ、これを求めさせるためのものなのです。「**神の国**」とは主イエシュアを王とする王国のことです。そしてこの王はいかなるものをも従わせる圧倒的、絶対的な「**力と権威**」を持ち、しかもそれが永遠に終わらない、決して滅びることのない「**力と権威**」です。ですから私たちもまた、この「**神の国を宣べ伝え**」るために、人々に御国を指し示すためにのみ、この「**悪霊を制して病気を癒やす力と権威**」を行使しなければなりません。

2. 旅

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:3 「旅には何も持って行かないようにしなさい。杖も袋もパンも金もです。また下着も、それぞれ二枚持ってはいけません。

「杖も袋もパンも金も」持って行かない、また「下着も…二枚持って」はいけないという、これは宣教に出かける時の恰好や心構えを説いたものではありません。実際に弟子たちはそのようにして出て行ったとは思いますが、今日これを文字通りに行っている伝道者や宣教師はほとんどいないでしょう。この御言葉にたとえられた、秘められた意味を知らなければなりません。この「**旅**」と訳された言葉はヘブル語でデレフ(דֶּרֶף)と言い、本来は「道」と訳され、しかもそれはエデンの園に植えられた「いのちの木への**道**」を指し示す言葉なのです。

創世記【新改訳 2017】

3:24 こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

この「いのちの木への道」とは、永遠に生きることになる「**道**」、すなわち救いの「**道**」です。つまりイエシュアはこの宣教旅行の中に私たち教会が救いに至る、ただ一つの「**道**」を表しておられ、私たちがイエシュアによって、その御名、その御業によってどのようにして救われ、永遠のいのちに至るのかということが、そのような神のご計画が指し示されているのです。そのような視点で捉えるならば、ここに秘められた意味はこうです。

まず「杖」マツテ(מַטֵּה)は本来、自分である印、身元すなわちどの部族のどの家の誰かということを示す、今でいう身分証明書のようなものでした（創世記 38:18）。ユダヤ人たちはどの部族の誰の子かということを重視し、神であられる主もまた部族、民族的に彼らを選んでおられますが、私たち異邦人の教会はそのような身分、国籍、人種、家柄に関係なく、ただ主イエシュアの御名の権威によって選ばれています。ですから私たち教会に「杖」マツテは必要ないのです。

次に「袋もパンも金も」必要ないということですが、「袋」は「パン」と「金」を入れるためのものです。「パン」レヘム(רֶחֶם)は本来、労苦の末に得られる「糧」つまり報酬を意味する言葉で(創世記 3:19)、またその報酬を得るための働き、責任をも指します。その「パン」レヘムが必要ないとは、私たちは何をしたか、どんな労苦を、どのような働きをしたかということ救われるのではないということです。またそれは「金」で買えるようなものでもありません。救いはただ主イエシュアの御名によって選ばれ、呼び集められることによってのみ与えられるのです。それが「袋もパンも金も」必要ない、というイエシュアの御言葉に秘められた、私たち教会に対する救いのご計画です。

では「下着も…二枚持って」行かないようにという御言葉についてはどうでしょうか。「下着」と訳されていますが、このヘブル語クットーネット(קִטְוֹנֶת)は本来、神がアダムとエバに与えられた「皮の衣」を指し示す言葉です。

創世記【新改訳 2017】

3:21 神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。

この「皮の衣」と聞くと私たちは普通、動物の毛皮を思い浮かべてしまいますが、この「皮」を意味するオール(אֵיל)は動物の毛皮だけでなく、人の皮、皮膚をも指す言葉なのです。この人の皮としてのオールについて、エゼキエル書にこのような記述があります。

エゼキエル書【新改訳 2017】

37:1 【主】の御手が私の上にあった。私は【主】の霊によって連れ出され、平地の真ん中に置かれた。そこには骨が満ちていた。

37:2 主は私にその周囲をくまなく行き巡らせた。見よ、その平地には非常に多くの骨があった。しかも見よ、それらはすっかり干からびていた。

37:3 主は私に言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるだろうか。」私は答えた。

「【神】、主よ、あなたがよくご存じです。」

37:4 主は私に言われた。「これらの骨に預言せよ。『干からびた骨よ、【主】のことばを聞け。』

37:5 【神】である主はこれらの骨にこう言う。見よ。わたしがおまえたちに息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。

37:6 わたしはおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちのうちに息を与え、おまえたちは生き返る。そのときおまえたちは、わたしが【主】であることを知る。』

「肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちのうちに息を与え、おまえたちは生き返る」という、これは復活の預言です。細かく解き明かすならば、「肉」バーサール(בָּסָר)は「良い知らせ、福音を伝える」という意味のバーサル(בָּשָׂר)と同じ綴りの言葉です。つまりヘブル語では「肉(体)」と「福音」は文字としては全く同じ言葉なのです。そして「息」ルーアッハ(רוּחַ)は本来「神の霊」という意味の言葉です。

つまり私たちは福音を信じ、聖霊を受け、新しい「皮膚」で覆われる、すなわち新しい肉体、朽ちない身体によみがえらされる、ということなのです。このように、動物の毛皮ではなく、「皮の衣」を人の皮、皮膚という衣で覆う、と解釈するならば、この「下着」クットーネットとは永遠に朽ちない身体を指し示しており、それはもはや取り換える、着替えるための二着目は永遠に必要なのです。それが「下着も…二枚持って」行かないようにという御言葉に秘められた救いの、神のご計画です。

3. 家

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:4 どの家に入っても、そこにとどまり、そこから出かけなさい。

私にとってはこの空知太栄光キリスト教会がこの御言葉に示された「家」です。ここにとどまり、ここから出かけ、そして今私はまたここに戻って来て「とどま」っています。私の人生はこの繰り返しです。それが今の私の最大の使命だと思っています。なぜならこう言われているからです。

ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

10:25 ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。

私は主イエシュアが私を迎えに来てくださる「その日が近づいていることが分かっているので」このように集まることを続けます。礼拝が終わればここから出て行きますが、それはまた集まるために出て行くのです。そのようにして私は主とお会いする日を待ち望みます。この「待ち望む」ことをヘブル語でカーヴァー(קָוָה)と言いますが、それは本来、このように用いられました。

創世記【新改訳 2017】

1:9 神は仰せられた。「天の下の水は一つの所に集まれ。乾いた所が現れよ。」すると、そのようになった。

ここで「天の下の…一つの所に集まれ」と訳されているのが本来のカーヴァーです。つまり、「待ち望む」とは集まる、集められることを指すのです。ですからどうぞみなさんも、主とお会いするその日まで、ともに集まり、主イエシュアを、御国を待ち望み続けましょう。

4. ちりを落とす

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:5 人々があなたがたを受け入れないなら、その町を出て行くときに、彼らに対する証言として、足のちりを払い落としなさい。」

「ちり」アーファール(עָפָר)は本来、ちりから造られた人の身体、つまりやがてちりに返る、今のこの私たちの朽ちる身体を指し示す言葉です（創世記 2:7）。

創世記【新改訳 2017】

2:7 神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

この「ちり」から造られた今の古い肉体を、罪にまみれた、やがて朽ち果てるこの死の身体を、やがて私たちは脱ぎ捨てる、まさに「払い落とし」で新しい朽ちない身体によみがえらされます。その事実を指し示す御言葉がこの「ちりを払い落としなさい。」です。まさにこう記されているとおりです。

I コリント人への手紙【新改訳 2017】

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変わられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

15:53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

5. 福音と癒やし

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:6 十二人は出て行って、村から村へと巡りながら、いたるところで福音を宣べ伝え、癒やしを行った。

「十二人は…福音を宣べ伝え」とあります。では彼らは何をどのように伝えたのでしょうか。文脈的にはもちろん「神の国」についての福音を伝えたのですが、それ以上の内容については言及されていません。しかし少なくとも今日多くの教会が宣べ伝えている福音、すなわち「イエス・キリストが十字架にかかり、死んで三日目によみがえられた、信じる者は救われる」というようなものではなかったはずで、なぜならこの時点ではまだイエシュアは十字架を担いでさえいなかったのですから。では「神の国の福音」とは一体何でしょうか。ここではそれを二つの言葉に集約しています。それは「福音」を宣べ伝えることと、「癒やし」を行うことです。しかしヘブル語でなければこの奥義は開けません。

先ほども述べたように「福音を宣べ伝え」るという意味のパーサル(רָשַׁר)と「肉(体)、肉体」という意味のパーサー(רָשַׁר)は綴りが全く同じで、この両者は文字としては同じ言葉です。つまり「福音」とは抽象的、精神論的な目に見えないもの、実体のないものではなく、肉、身体、実体を持ったものであり、それはまさに私たちに肉体が、身体が与えられるということであり、しかもやがてこの福音として与えられるその身体は、病むことも傷むことも疲れ衰えることも飢え渴くこともない、そして決して死ぬことのない、永遠のいのちの身体です。そのような疲れ、傷つき病み、日々衰えていく今の現実ではとうてい考えられないようなものが、まさに誰も見たことのないものが与えられるという事実を指し示しているのです。先ほどのI コリント 15:52「終わりのラッパとともに…」という預言にあることがやがて私たち教会の上に成就します。それはもちろん以下の預言の成就でもあります。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

このように、「福音」とは「キリストにある死者がよみがえり」ることなのです。

また「癒やし」に秘められた意味も同様です。「癒やす」という意味のラーファアの最初の言及を見ましょう。

創世記【新改訳 2017】

20:17 そこで、アブラハムは神に祈った。神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒やされたので、彼らは再び子を産むようになった。

20:18 【主】が、アブラハムの妻サラのことで、アビメレクの家すべての胎を堅く閉じておられたのである。

アブラハムの祈りによって女たちがラーファア「癒やされた」とあり、その結果「再び子を産む」とあります。このようにラーファアは本来、再び子を産むこと、つまり「再び生まれる」ことを意味する言葉なのです。私たちはやがて必ず死ぬこととなりますが、アブラハムのゆえに、すなわちアブラハムの子孫、イスラエルにつながる者として「再び生まれる」すなわちよみがえることになるのです。そのよみがえりの新しいいのちは、その肉体は「いつまでも主とともにいること」を可能にする永遠の身体です。これが「福音」と「癒やし」に秘められた神のご計画についての奥義です。私たちが福音を伝えるかどうか、またどう伝えるかが重要なではありません。また病氣や癒やされるかどうか重要なではありません。主イエシュアが再び来られ、私たちを永遠のいのちの身体によみがえらせてくださることこそが重要なであり、これは私たちの働きでも責任でもなく神の、主イエシュアだけが成し遂げられる御業なのです。

今日、この福音と癒やしの奥義、すなわち永遠のいのちへのよみがえりの事実を、そのような神のご計画をしっかりと覚えてください。そしてともに祈りましょう。「どうかお言葉どおり、この身になりますように。主イエシュアの御名によって、アーメン。」